



TITLE:

記事経済学会

AUTHOR(S):

CITATION:

記事経済学会. 経済論叢 1967, 100(2): 163-166

ISSUE DATE:

1967-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/133205>

RIGHT:

經濟論叢

第100卷 第2号

貨幣恐慌とインフレーション……………島 恭 彦 1

アークライト型紡績工場……………堀 江 英 一 21

行列簿記小史……………高 寺 貞 男 44

製鉄業における機械体系の確立過程……………坂 本 和 一 65

昭和42年8月

京 都 大 學 經 濟 學 會

記 事

経 済 学 会

定例研究報告会および新入大学院生歓迎会は、5月18日（木）午後3～7時に楽友会館において開催され、下記の研究報告（要旨）がおこなわれた。

I バーナードの組織論

京都大学大学院学生 稲 村 毅

バーナードの組織論は、形式的には、テラー以来の「伝統的組織論」に対立するものとして、インフォーマル組織に焦点をあてた「人間関係論」における「協働」技術観点を継承しつつ、フォーマル組織の行動科学的分析を指向する「近代的組織論」の源流を成すものとして位置づけられる。かかる理論が今日のブルジョア経営学における組織論に及ぼしている顕著な影響力の意義を理解するためには、この理論に内在する論理の道筋をたどり、そこからそのバックに控えている一定のフィロソフィーを見出し、更にかかるフィロソフィーの成立背景及びそれと現代との関係を理解することが必要である。

バーナードは自らの理論を「組織の社会学」と呼んでいるけれども、この「社会学」の基礎にはいわば「組織の心理学」が横たわり、更にいわば「組織の倫理学」が全体を補足している。

バーナードにおいては組織は「協働体系」の中核に位置する一つの体系（共通目的、貢献意欲、コミュニケーションより成る）であるから、分析の焦点はこの体系の状態、従ってまたその内的諸変化のプロセスにおかれる。他方、この体系は「社会化された活動の体系」としてのみ自らを実現するから、「組織人格」と「個人人格」との対立が前景に出る。それ故、分析の焦点としてのプロセスの問題は、組織と個人との調整の問題として現われる。この調整そのものは極めて技術論の問題であり、この取扱いにおいてバーナードの管理者視点及び心理主義が最も明瞭に現われる。貢献意欲を引出すための誘因論、権威受容説の主張がその具体的内容である。それはバーナードの理論を「管理者教育論」として特徴づけるに十分である。かかる特徴を更に強化するものとして「協働の道徳的側面」論がこれに接続する。それは「協働への信念の創造」を管理責任の最高の形態だとする一種の有機体観・目的論的信念の直截な表明である。バーナードが組織論の中に忍びこませたかかる規範的思想は、もちろん単なるかれの主観の産物ではな

い。1930年代のNIRA期前後の激しい労資対立と経営不安を背景に、労組対策として、しかもこれを管理者による個人対策としてうちだされたものであることを知る。バーナードはこの対立を、結局は個人の心理的要素から理解し、管理者層並びに労働者の思想改造によって克服しようとしたのである。バーナード理論の正しい理解には、このようなイデオロギー的文脈におけるその虚偽性把握が、不可欠の一要素を形成する。

Ⅱ 社会主義世界市場における価値法則

京都大学大学院学生 建 林 隆 喜

社会主義圏内の貿易と国際分業を一層発展させるにふさわしい合理的価格体系を社会主義世界市場に樹立する問題と関連して「固有の価格基盤」への移行をめぐる周知の論争がある。この問題は吾国では世界市場の「歴史的・内容的側面」の理解にかかわるものとして関心をあつめている。木下悦二教授は論文「社会主義世界市場における価値法則—松井教授の批判に応えて—」で、教授の国際価値論理解を媒介として固有の価格基盤否定論の正当性を論証された。通常この立場は、資本主義世界市場価格こそが国際価値を反映しているということを論拠として主張されるのだが、木下教授は国際市場価値否定論にもとづきこの論拠を退け、代りに次の2点を論拠として挙げられる。(1) 各個の社会主義国は生産手段の排他的所有者として相互に商品生産者と同様に関係しあい交換における等価性の要求をもつのであるが、(2) 国内に競争を規制する市場価値法則と生産価格法則が働かないため、各国が需給に働きかけのかぎりにおいて、資本主義世界市場価格の水準に影響を与えないといえ、社会主義世界市場内部に独自の価格を成立せしめることはない。

この主張は、価値法則は国内においてのみ作用し国際間には競争しか行なわれぬという国際価値論からの帰結である。それ故私は第1に国際市場価値論を積極的に展開しているコールマイらの諸理論の検討を通じて、私の国際価値法則の理解をしめた。ここではコールマイらとは異なる意味でだが国際市場価値を認め、国際価値法則と国内価値法則との相互関係について「価値法則は国内の生産流通を規制することなしには国際価値の法則たりえず、同時に国々のあいだの分業と交換を規制することなしには国内価値の法則たりえない」との命題を確認した。第2に、私は社会主義国の国内に作用しているところの価値法則の意義を強調し、これとの関連で社会主義における国際価値の法則を把握すべきだとした。さきの命題は社会主義においてもまた有効なのである。第3に私は、社会主義の基本的経済法則をこの論理のなかに位置づけようとした。この法則は直接的には国内でのみ作用するといえ、社会主義国際分業の展開は、この法則が部分

的には国境をこえる作用範囲をもち始めていることを示している。そのかぎりでは価値諸範疇のそれに照応した範囲での利用の可能性が発生発展しているものと思える。だから現行の価格形成形態はその当否は別として、利用の特定の様態を示すもので、これを原理的なものとみなすことはできない。

昭和42年度経済学会大会

6月2日 公開講演会

大会第1日の公開講演会は午後1時より法経第7教室において開催された。

1. イギリス労使関係瞥見

京都大学教授 岸本英太郎氏

2. 労働生産性の国際比較

京都大学教授 行澤 健三氏

3. 現場的経済学の立場

京都府知事 蜷川 虎三氏

6月3日 研究報告会

第2日の研究報告会は午後1時より生産開発科学研究所において開催された。

1. 宇野理論と価値論——「流通形態」と価値実体——

京都大学大学院学生 西野 勉氏

(本誌掲載の予定)

2. コンビナートと地域社会

立命館大学教授 中村 忠一氏

(本誌掲載の予定)

3. 19世紀末ドイツ社会主義の思想的性格——とくに急進派の革命思想——

甲南大学教授 山口 和男氏

(報告要旨)

マルクスおよびエンゲルス以後、ヨーロッパあるいはロシアにおいてマルクス主義が、それぞれの社会主義運動に受容され継承されてゆくのだが、そのマルクス主義の継受の仕方は、その運動主体の置かれている歴史的条件や、それに主体の担っている思想的体質によってさまざまである。19世紀末のドイツ社会主義運動、ドイツ社会民主党の活動においては、周知のようにカウツキー、ベーベル等を中心とする中央派と、ベルンシュタインに代表される修正派とが対立するが、この両者のいずれとも異った思想と理論を

もつ急進派が90年代後半よりあらわれ、やがてローザ・ルクセンブルクを中心とするグループとして結集した。その最初のひとりである Alexander Israel Helphand (通称 パルヴス Parvus) をとり上げて、かれにおけるマルクス主義の思想的特質を解明することが、本報告の意図する所である。

パルヴスは、ドイツ社会民主党の上のべた阿派をともにオポチュニズムとして批判するのだが、その際かれの歴史認識の根底には、それぞれの民族国家のワタをこえて発展する一全体としての世界資本主義論がある。すなわち諸資本主義は世界市場の中でひとつの統一体にくみこまれて発展しようとする傾向がある。先進資本主義が後進国と接触する過程で後進国の工業を開発し、それがつぎつぎと地表上のあらゆる部分に拡大してゆくという形で、世界資本主義が発展するものと考えられている。しかし世界資本主義のこの自然的律動は、各民族国家の政治的伝統の圧力によって阻害されるのである。つまり単一世界市場における各国の経済的平準化、たとえば工業化に伴う穀物価格の高騰と、後進国との接触によるその低廉化・平均化に対して、保護関税が人為的に高い穀価を維持しようとする圧力が加わる。それによって世界市場は不自然に狭隘化するため、それを暴力的に拡大しようとしてさらに植民地獲得政策が展開されることになる。かくて資本主義列強の植民地をめぐる衝突が激化する。しかしパルヴスによると世界政治の矛盾の焦点は、西ヨーロッパでなくむしろロシアにあった。かれは世界革命の発火点としてのロシアを、だれよりも早く予想し、かつそこでの革命の組織論としての『労働者民主主義』、『アルバイター・レーテ』を提案したのであった。こうしてパルヴスにおける革命思想は、抽象概念としての世界資本主義論と、そこからの政治的帰結としてのロシア革命とによって、その特殊性を把握することができるのである。

4. イギリス産業革命期における工場体制——イギリス紡績業における hierarchy の再編について——

京都大学教授

堀江 英一氏

(本誌掲載の予定)